



精神薄弱児における農耕作業の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 佐藤, 研司, 佐々木, 寛, 中島, 順子, 吉田, 昭穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001854

精神薄弱児における農耕作業学習の実践

佐藤研司*、佐々木 寛*、中島順子*、吉田昭穂

北海道教育大学岩見沢分校農学研究室

Kenji SATO, Hiroshi SASAKI, Junko NAKAJIMA, Akiho YOSHIDA
On the Practice of Teaching Agricultural Occupation to
Mentally Retarded Children

は し が き

精神薄弱児教育における作業学習は、精神薄弱児の社会自立との関連から、その必要性と重要性が問われ、この教育の中心的な指導形態として研究、実践が行なわれてきている。

作業学習の意義は、作業学習と言われる指導形態を利用して、精神薄弱児が将来、社会生活に必要な生きる能力を獲得させるために、それを準備し援助する過程と考えられ、精神薄弱児の可能な能力や人間としての全人的な側面を啓発し発達させることができると考える。

今日の作業学習の課題は、精神薄弱児の全人的な人間の形成と彼らが将来、社会生活を行なうとき、実践的な態度、姿勢が必要であるので、それを養成することにあると考える。そこで、この課題を追求する作業学習として自然を素材とした農耕作業学習にもとめ、実践を試みた。その結果をここに報告する。

I 実践学校の概要

1) 所在地および学校名

実践学校は室蘭市南西部に位置し、室蘭市の最西端にある。所在地は北海道室蘭市港南町2丁目10番14号、校名は室蘭市立港南中学校である。

2) 学 校 規 模

学級数18(特学2)、生徒数671名 職員数35名

3) 教 育 目 標

教育指標「いつも希望に燃えて前進を続けよう」

- 互いに人格を尊重し協力し合う人。
- 進んで学習に励み、科学的かつ知性豊かな人。
- 健康で勤労を尊び、気力にあふれる人。
- 公正な判断をし、責任をもって行動する人。
- 明朗で情操豊かな人。

4) 自然、社会環境

* ※北海道室蘭市港南中学校教諭

室蘭市は人口 180,000 の工業都市である。そのため校下にも港湾に面して、いくつかの工場があり、校下の父兄の大半は工場などに働く勤労者である。

実践学校の位置する地域は、室蘭市でも最も静かで、自然環境のよいところであり、高級住宅地でもある。

5) 特殊学級の教育目標

「仲よく、明るく、正しく、たくましく」

- ・自分を大切にし、他人と協力できる人。
- ・明るく楽しい生活のできる人。
- ・よろこんで働き、仕事をじょうずにこなせる人。

6) 特殊学級の開設と経過

昭和37年4月に1学級開設し、絵鞆小学校へ併置され昭和41年4月に精神薄弱児収容施設白鳥学園(公立)に本校の分教室を学級開設した。昭和42年4月絵鞆小学校併置の学級を本校に移転し、白鳥学園分教室を絵鞆小学校に併置した。昭和43年4月、絵鞆小学校併置の分教室を本校に吸収して、2学級となる。その時点で、白鳥学園の生徒が本校に通学し、現在にいたる。

7) 特殊学級の状況¹⁾

特殊学級の状況はつぎの各表のとおりである。

第I表 障害別

障害種類		43年	44年	45年
1.	単純性	13	9	11
2. 二 重 障 害	身体病弱	2	2	0
	肢不自由	0	2	0
	言語障害	3	3	0
	難聴	0	1	0
	性格異常	0	0	0
	精神疾患	3 ²⁾	3 ³⁾	2 ⁴⁾
	その他	0	0	2
3.	その他	0	5	6

第II表 知能

知能指数	43年	44年	45年
76以上	1	5	4
75～61	2	9	5
60～51	5	2	5
50～41	5	8	4
40以下	8	1	3

第III表 家庭の状況

経済状態	43年	44年	45年
生活安定	9	10 ⁵⁾	10 ⁶⁾
教育補助	1	3	2
生活保護	1	2	1
白鳥学園	10	9	7

第IV表 通学の状況

種類	43年	44年	45年	
白鳥学園	10	9	7	
一般家庭	校下	4	8	6
	校下外	7	8	8

1) 農耕作業学習に従事した生徒の実態を、それぞれの項目で各年度別に示した。

2). 3). 4) Epilepsy である。

5). 6) は双児家庭が含まれる。

II 農耕作業学習の実施の概況

本校における農耕作業学習は、生徒と農耕を結びつける媒体を農園とし、その経営の実践を行なった。その概況について述べる。

1) 目 標

- (a) 生徒に希望をいだかせ、血と汗と涙のまざりあった人間らしさをもとめる。
- (b) 農耕作業学習の中で、教育相、生産相、情操相を調和よく保たせ、それを強く求める。
- (c) 農園での農耕作業学習を通して、次のことが養なわれるようにする。
 1. 生命的な世界を体得させ、自然を愛する人間を育てる。
 2. 人を思いやり、人と協力する態度の習慣化をはかる。
 3. 自尊心やいつも自主的な動きをもとめ、責任感を育てる。
 4. 働くことを通して、その厳しさを学ばせ、それを生産のきびしさと関連させ、経済生活を尊重する態度を養なう。
 5. 自然の接触の中から、思考力や創造力を育てる。

2) 基本方針

- (a) 農園は作業学習の一環として経営し、生徒みずからの手で管理運営し、生活経験の総合体験場とする。
- (b) 農園には種々の作物、蔬菜、花卉などを作付けする。
- (c) 生産相の性格を發揮し、生産されたものは学級での調理実習の材料とし、残りは機会をとらえて販売する。その収益については、農園設備運営費や学校造園整備費とする。

3) 運営方法

- (a) 農園を生徒に割り当て、指導者の指導のもとに、自主的に責任をもって管理させる。
- (b) 農園には表示札を立て、多角的に経営する。

4) 内 容

(a) 作 付 計 画

1. 蔬菜栽培 キャベツ・ニンジン・ゴボウ・ダイコン・ネギ・カボチャ・エンドウ・ホウレンソウ
2. 作物栽培 水稻・ジャガイモ・トウモロコシ・ヒヨウタン
3. 花卉栽培 ダリア・カンナ・キク・サルビア・ケイトウ・マリーゴールド・コリウス・アゲラータム・ハボタン・オジギソウ・キンギョソウ・サイネリア・プリムラ・デージー・パンジー・チューリップ・ペチュニア
4. 温室園芸（鉢物の生産と育苗〔蔬菜・花卉〕を主とする）観葉植物・ゼラニウム・アロエ・サボテン・カランコエ・フユサンゴ・ハカタツユクサ・ムラサキオモト・オリズルラン・キカタバミ・オキザリス・ユッカラン・ガステリア・ツメクサ・フブキノマツ・カサネオオギ・アデスガタ・カゲツ
5. 花木 ツツジ・ヤツデ・アオキ
6. しいたけ栽培

(b) 農園経営年間計画

農園経営年間計画は第V表のとおりである。

(c) 年 間 予 算

国庫 60,000円, 市費 92,000円, P T A 30,000円, 学級費 90,000円

第V表 農園経営年間計画

事項 月	一 般 事 項	露 地	温 室	水 田
4	1. 農園経営計画作成 2. 農園整備 3. 農具の点検整備 4. 除草	1. 耕起・整地 2. しいたけ菌の打ち込み	1. 温室の塗装・整備 2. 鉢の購入 3. 播種	
5	1. 除草	1. 各圃場の耕起と整地 2. 播種植え付け (ジャガイモ, トウモロコシ ニンジン, ダリア, カンナ, ゴボウ, 菊, エンドウ)	1. 鉢物用苗物の植え付 け 2. 移植 3. カンナのめだし	1. 耕起 2. 代かき 3. 施肥 4. 移植 5. 水管理
6	1. 農具の整備	1. ダリアの支柱たて 2. チューリップの摘花 3. ニンジンの間引 4. キャベツの定植 5. マリーゴールド, サルビア アゲラータム, ケイトウの 移植 6. チューリップの球根ほり 7. カンナの定植		1. 中耕 2. 除草
7	1. 除草 2. 消毒	1. マリーゴールド, サルビア, アゲラタム, ケイトウの花 壇へ定植 2. パンジー, デージーの播種 3. ホウレンソウ, エンドウの 収穫	1. ひょうたんの棚つく り	1. 深水かんがい 2. 追肥
8	1. 除草 2. 消毒	1. ダリアの摘花追肥 2. ジャガイモの収穫 3. ダイコンの植えつけ	1. 鉢あげ準備	1. 開花受精 2. 落水
9	1. 除草	1. キャベツ, トウモロコシの 収穫 2. チューリップ, スイセンの 植えつけ	1. 鉢あげ	
10	1. 展示即売会	1. カボチャ, ダイコン, ニン ジン, ゴボウの収穫 2. 貯蔵	1. 温室整理 2. 圃場整備	1. イネかり
11	1. 除草 2. 後かたづけ 3. 表示札とりはずし 4. 冬がこい 5. 農具の整備格納	1. 圃場整備	1. 温室整理	
12			1. 温室の温度管理	

1		1. しいたけほだ木切り出し 2. ねせこみ	1. 温室の温度管理
2	1. 農具整備	雪わり	1. 温室の温度管理
3	1. 新年度準備	1. 雪わり	1. 耕起 2. ダイアの株分け芽だし 3. 播種

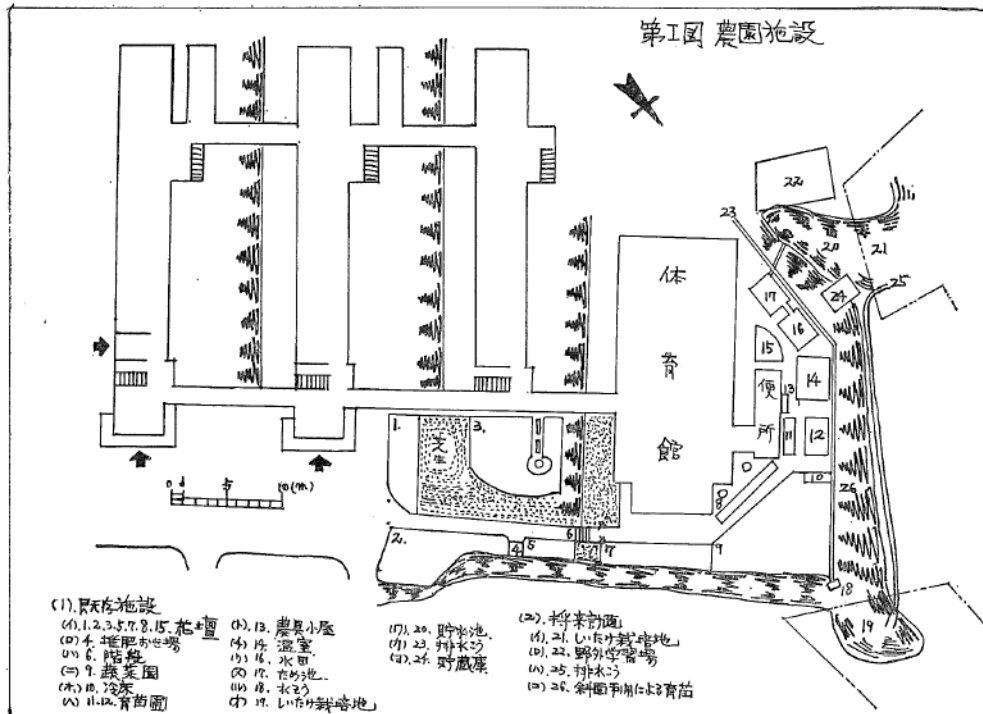
農園関係年間予算 20,000円

(d) 農園備品と農園施設

1 農園備品

- ・くわ ふつうぐわ (13)(7) ・レーキ (6)
- びちゅうぐわ (3) ・フォーク (1)
- さんぼんぐわ (3) ・移植鍬 (10)
- 草とりぐわ (8) ・スコップ (15)
- ・ジョウロ (1) ・記録温度計 (1)
- ・噴霧器 (1) ・酸度検定器 (1)
- ・散粉器 (1) ・温度計 (2)
- ふるい (2mm, 3mm, 5mm) (4)
- ・万能運搬箱 (15) ・せんでいばさみ (3)
- ・竹ぼうき (5)

(7) () の中の数字は個数をあらわす。



2 農園施設

農園施設は第 I 図のとおりである。

3 施設の造成及び活用の概要

施設の造成及び活用の概要は第 VI 表のとおりである。

第 VI 表 造成及び活用の概要

施設名	年 度	年 度 別 作 業 状 況 及 び 今 後 の 計 画			
		昭 和 43 年 度	昭 和 44 年 度	昭 和 45 年 度	昭 和 46 年 度
1 花 壇			客土(ダンプカー1台) ピースで区画	ダリア20球, ひまわり	現状の維持
	2	笹刈りと高木3本伐採する。		石ひろい, 笹の根ほり, 整地ピース区画 ダリア, 40球, カンナ 50球	現状の維持
	3		客土(ダンプカー3台) ピースで区画 マツバギク, ハボタン, 笠菊	ダリア30球 カンナ10球 ハボタン12	現状の維持
	5	笹刈りをする, 高木4 本伐採する。		石ひろい, 笹の根ほり, 高木の切り株のほりお こし, 整地, ダリア22 球, カンナ10球	現状の維持
	7	笹刈りをする, 高木6 本伐採する	ピースで区画	笹の根ほりと切り株の ほりおこし ダリア34球	現状の維持
	8		客土(ダンプカー1台) ピースで区画 ケイトウ, マリーゴールド 植えつけ	陽陰でもたえる植物を 植栽したいと考えてい る。草つけとモスワロ ックス	植え付け60品種の検討
	15		客土(ダンプカー2台) ピースで区画 切り花用として利用ダ リア15球グラジオラス60球	カンナ40球, ダリア28 球1, 2, 3, 5, 7, 8, 15の花 壇のダリアの株わけの 結果, 800球となる	現状の維持
	4 堆肥お き場			ゴミ捨て場を堆肥おき 場に利用, タタミ17枚, 乾草をつむ。	そのまま利用
6 階段		生徒の発想で新設する	階段に土を入れ補強		
9	昭和43年度当初, 校下の父兄の畑地を借用して農耕作業をする。自分たちの畑がほしいという生徒の要求があり農園地として適当な場所を検討する。その結果, 体育館のうらを農園とすることに決定。生徒とともに開墾する。自生の高木25本伐採し, 笹刈りをしたのち耕起する。	耕起 客土(ダンプカー8台) リンゴ箱, リヤカー, 一 輪車で運搬植え付け作物 ジャガイモ(収穫75kg) ニンジン(収穫40kg) ゴボウ(収穫35kg) ホウレンソウ(収穫20kg) キャベツ(収穫45球) 大根(収穫400本) カボチャ(収穫15個) トウモロコシ(収穫200本) ネギ(収穫10kg)	ピースで区画 耕起 植え付け作物, 前年度 と同様。収穫はジャガ イモ80kg, 大根1000本 で, 残りは前年度とあ まり変わりはない。	植え付け作物の検討栽 培法の研究 ビニールハウスの検討	
10 冷床		苗をつくるために新設 キャベツ, マリーゴールド, サルビア, ハボタン, ア ゲラタムの苗	移植圃場として利用		

11	育苗圃場		苗の移植場所にこまり新設する 客土(ダンプカー1台) 笹の根ほりの際に出た土をふる川にかけたものリンゴ箱で35箱客土 ビースをならべて区画 チュールリップ, マリーゴールド, ケイトウの移植をする	ケイトウ, アゲラータム, コリウス, ハボタン, マリーゴールド, サルビアの移植	ビニールハウス
12			花卉類の移植場所にこまり設置する 客土(ダンプカー3台) そのほか, 笹の根ほりの際にでた土をふるいにかけたものリンゴ箱で46箱 ビースで区画 マリーゴールド, ケイトウ, ハボタン, キャベツの移植	マリーゴールド, サルビア, オジギソウ, アゲラータム, コリウス, ハボタン, ケンガイギタの移植	ビニールハウス
13	農具小屋			農具の管理にこまり新設する。	農具の機能的配置の研究
14	温室		天沢小学校の校舎改体の古材を利用して, 26.4cmの温室を建設。 ごう雪により倒かい, 職員と生徒の力で復旧	ガラスの入れ替え, 白ペンキで外装塗装耕土搬入(ビースで区画) たな作り 温室の換気窓のとりつけ, ネギ, キュウリ, トマト, ナス, 千成ヒョウタン, カボチャ, マリーゴールド, アゲラータム, コリウス, サルビア, ハボタン, ケイトウの苗の育成 鉢物の生産(20種類) 自記温度計の設置	作付け品種の検討 冬ごしの検討 温室の拡充
17	ため池		水田のかんがい用水が冷たいため, その水温を上昇させるのに, ため池をつくる。ほりおこし	深さ30cmまでほりさげる水をためる。 水田に利用	効果的に水温が上昇するよう改良
18	水槽		冷床の灌水用の水にこまり, 沢水を利用し, 水槽に貯水する。これは, 生徒の発想による。	温室, 冷床の灌水用として利用	水槽の拡大
19	しいたけ栽培		栽培地の選定, 整備(笹刈り)	試験的にしいたけほだ木30本購入配置25kg収穫	1500~2000本増加して本格的に栽培する。他のキノコについても検討
20	貯水池		水田のかんがい用水の必要から沢をせぎとめ貯水池を作る。	貯水したが, ろう水がひどいので全面改良 土管を利用して, 水路を作り, ため池まで水を流す。	ドジョウ, フナ, 金魚の養殖 様子をみて, 改良の予定
23	排水こう		排水こうの泥あげ	排水こうの泥あげ	排水こうにふたをつける予定である。
21	しいたけ栽培				沢を利用して, 19と同様にしいたけを本格的に栽培する。800~1500本
22	野外学習場				野外で学習する場を作る計画である。普通学級の生徒も利用できるようにする。

25	排水こうの設置				斜面を利用するため、排水こうをほり、斜面の湿気をとる。
26	斜面の利用				農地が狭いので斜面を利用し、育苗に使用する。
24	貯蔵庫			ダリアの球根の冬ごしにこまり建設、未完成	マッシュルーム用に利用することを考えている。
	その他		バラのアーチを作る計画であるので、ツルバラを2カ所に植えつける。	シラカバ、シナベニアを利用して表示柱をたてる。	生徒の作業終了後手洗いのため、水道施設が必要であるので新設したい。

Ⅲ 農耕作業学習の導入の動機

自然を素材とした農耕作業学習を作業学習の一環として取り入れた理由は、「私たちの畑で作物を作ってみよう」という生徒の強い要求があったからである。それまでの作業学習は木工や金工を主とする作業をおこない、農耕作業学習については、校下の理解のある父兄から26.4m²ほどの耕地を借用して、「バレイショ」「ダイコン」などの作物を若干栽培していたのが現状であった。

生徒の自分たちの畑で作物を作ってみようという要求は、「借りものの畑では思うようにできない」との認識と「私たちの畑で作物を作ってみよう」との欲求の芽ばえが、生徒の意識の中に、同時に生じたと思われ、それは26.4m²の生活経験から生まれてきたものと信じる。また生徒たちが「自分たちの畑を作るんだ」という目的に価値志向していったことは、意義があり大切にしなければならないことであると考え、農耕作業の導入にふみきった。

生徒の要望と同時に、教師の中からも農耕作業学習の導入の必要性が問題にされた。生徒の実態からいって、性格的に問題が残る生徒に、人間が本来もっている自由を獲得させなければならないとの共通理解の立場から、農耕作業学習によって、それらの personallty 傾向を変換・調整するとの方向で確認した。

知的能力のみの発達障害だけでなく、「暗い」「いつもぼかんとしている」「周囲に無関心」「飽きっぽい」「動作が鈍い」「表情に乏しい」「無口で自分から発言しようとしなない」「意思表示の不活発さ」「気分の変動が激しい」「集団に適応していくことが困難」「固執性が強い」の面や自己中心的で、欲求を統制し自己指南していくことが困難であるという全人格的な障害を持つ生徒の情緒の安定化、調整化を計る。暗さや種々の抑圧、無力感、劣等感などの自己否定的な気分を明るく、気力に満ちた前進的で、解放的な態度へ転換し、願望の充実を満たさなければならぬと考えた。この主旨を明確に示せる学習は、図画工作に見られるような表現的な活動もあるが、意図された自然との生活によって解決されると考え、農耕作業学習を取り入れた、農耕作業学習を教育的な観点から見ると種々の意義、効果があると考えた。

農耕作業学習の作業の過程で、手、腕、背、脚の強さや器用さが養われ、目と手の共応動作、足と手と目の共応動作、両手の共応動作が強く作られると考える。また感覚や知覚の側面では、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、色彩弁別、筋肉感覚が養われるものと考えられる。⁸⁾

また、ノーマルな生徒が校舎の窓から精神薄弱児の作業する姿を見るとき、彼らから人間的・教育的な影響を受けるであろうし、それは、精神薄弱児への理解、認識を育てることができる、また、ノーマルな生徒から作業に対しての社会的評価を得ることができると考えた。

8) 機能訓練、感覚訓練に有効であると思われる。

IV 自然を素材とする意義

元来、人間は自然物を食料とし、自然物を加工し、衣服としたり住居とする。自然は人間の発育や発達に密接に関連している。また、自然との関係が人生に影響し、精神的な価値（人格）の方向を規定するまで及ぶものと考え、自然を素材とする意義を見いだした。

- 1) 生徒の精神衛生的（情緒の安定・調整）な立場から大切であり、それは人間のよさを発展させ、毎日の生活に喜びを感じ創造していくという本来の人間的な自由の獲得という側面から重要なことである。生活経験を拡大し精神薄弱児の人間の成長を豊かに創造的に展開させることができる。
- 2) 人間にとって、最も大切なことは生命を尊重することであり、それを学ばせるために、口先の空論だけでは、その効果を望むことができない。自然を利用した農耕により、学ばせることができると考える。

農業の発生は、長い歴史の過程で人間を生かそうとして、人間はたゆまない努力をした。その根底には人類の生命を培うという思想が流れ、人間の生命が自然の生んだ生命に連なり、それがやがて、自然それ自体の生命に連なることを明確にした。「人間は自然の子である」「自然は生命の母である」と言われる理由がそこにあり、人間の生命は農業を通して生命的な世界に連なり、農業は生命の基礎であることをわれわれに悟らせる。

この背景のもとで、精神薄弱児に栽培を取り上げるとき栽培技術を主とするのではなく、農耕を理解し、生命的な世界を感じさせることを目標としなければならないと考える。「生命のあるもの」を取り扱うことによって人間にとって一番大切な生命の尊さを教えることができ生命を守ることを自覚し、実践を通して、身に付けることができると思われる。また、生命の尊さ（愛護精神）からヒューマニティへと結びつき、人を尊ぶことを学ぶことができるであろう。

- 3) 人間は、元来自然の法則を control することができなく自然の法則に従わなければならないのが、人間と自然の関係における真理である。自然現象は静的ではなく、常に休止することなく active に活動している。自然を相手に栽培をするとき、人間はこれと順応しなければ栽培する目的を達成できない。その場合、人間は自然と同じように常に休止することなく active に活動されることが要求される。「春が来れば」「秋になれば」と言う季節と結びついた作業を人間の都合によって伸ばすことは許されない。人間は自然を意識し、自然に対して誠実・勤勉になることが強調され、結果的に生産のきびしさの認識とその理解に結びつき、経済生活を尊重することに連なると思われる。生徒は「農業は天地人三者合一」によって営まれることを身をもって体験できるであろう。
- 4) 自然を素材とした農耕作業学習における教育的な効果は、作業を進める際の人との信頼関係や人と協調し、協力する人間関係を学ぶことができるし、自然の興味の喚起・自然認識が高められ、科学的な思考態度を芽ばえさせたりすることなどがあげられる。また、自分自身の発想で進んで物事にあたる態度、日常生活や学習についてはっきりした目的指向性をもたせることができる。そのことは、生活経験を拡大させたり、生徒の能力の意外な面を発見することができ、有効な効果をあげることができる。

V 目標にかかわる問題

- 1) 目標の基本的なもの

作業学習の目標は、狭義の職業教育と異なるものであると考えなければならない。作業の知識・意欲・態度・技能を問題にして、それを全面に出したり、生産のみに終始、生徒を生産に追い込

み、職業人的根性の育成を計ることも大切であるが、それだけでは教育の効果を上げることは難しいことであるとする。作業に求めるものは、社会自立と関係があるので、それを設定する際は、非常に困難がある。しかし、その際に考えなければならないことは、全人的な人間の形成に主眼を置くことであろう。

農耕作業学習の特性を考えて、それに求めるものを、教育相、生産相、情操相として設定した。

(a) 教育相

1. 実習園
2. 教材園(見本園)
3. 作業の習慣形成
 - ・意欲・知識・技能・態度
4. 性格の育成
 - ・対人関係・自己指南・計画性・持続性(根気)・安全と能率・自己理解

(b) 生産相

1. 物を作る喜びを体得させ、それを役立たせるといふ生産のきびしさを学ぶ。
2. 経済との結びつきを考え、それを尊重する態度をつくる。

(c) 情操相

1. 豊かな人間づくりのために
 - ・生命の尊重(愛護精神の育成)・責任・情緒の安定と調整・余暇の善用(飼育, 栽培)
2. 人間の生きかたを知るために
 - ・人間の生活と自然の関係と自然認識の高揚・季節感を感じさせる。環境の美化意識の高揚
3. 体位(体力)の増進のために
 - ・体力の増進・健康の回復

教育相: 生徒が汗をながし、ひとつの目的に向かって作業をする場所は、生徒が作業がしやすくなるように環境の調節・整備や道具の整備, 作付区画を明確にする必要があり, 生徒が変革される教育・生活の場とすることを教えることが大切である(実習園)。

作業をする場所が生徒の日常生活の眼前に生きた教材を提供する性格を持たせ、その中で生徒が目的指向性を持ち、観察力、思考力、創造的工夫を高め知的増長、生活経験の拡大を計ることに努めなければならないと思われる。それは教科の関連を含んだ総合体験学習場であることを望むことであり、理科の実験場、数量の実測、実験、美術の応用の場に高めることである。また、そこに存在する生きた教材は、能力差のある生徒の興味、欲求や発達段階に応じて弾力的に取り扱うことに有効である。

別な角度から考えると、この教材園がノーマルな生徒の学習場としても利用でき、ノーマルな生徒から社会的評価および精神薄弱児の理解を得ることができると考える(教材園)。

作業の習慣形成では、「作業の時間が理解でき、作業にとりかかる」「作業に興味を持ち、自主的に最後までやりぬこうとする気持」「整理整頓」などの意欲の問題や「作業の規則、および農耕道具が理解でき、作業内容を把握して作業する」「簡単な作業なら指示されなくてもできる」という知識の側面を取り上げなければならない。また、技能・態度では「指示されたとおり、ふざけないで、無駄話をしないで根気よく作業をする。」「周囲のことや友人の動きを注意しながら、機敏な動作で作業リズムにのり、作業を行なうことができる」「気分を一定に持続させることができ、材料や生産物の品質に気を付けることができる」「作業中に機転をきかすことができ、工夫や発想をだし、作業を進める」という面を配慮しなければならないと考える(作業の習慣形成)。

人間社会で集団生活をする際に基本的に問題になることは、自己指南や対人関係などで、それを育成することが大切である。作業の持続性・計画性・安全・能率、また「人に頼らない、わからないことは聞く」の自己を理解する面を忘れることができないと考える（性格の育成）。

生産相：精神薄弱児には、物を作り出す喜びを感じさせることも重要であるが、物を作って、役に立たせるという生産のきびしさを学ばせることも大切である。また、生産の仕組み、消費の仕組み、物価などの関心は、生活とかかわりあいを持たせて指導し、その中で、経済生活を尊重することを学ばせる必要がある。

情操相：豊かな人間作りや人間の生きかたを知る。また、健康の増進などを教育相、生産相と同じように重要な側面として取り上げることが大切である。

2) 三相の取り扱いについて

特殊学級に在級する生徒をひとり、ひとりを見たとき、精神薄弱の状態・能力に差があり、種々の特性を示しているのが実態である。そのため、おのずからひとりひとりの特性を把握し、その根拠から社会自立をふまえた教育目標は異なる。この点が生徒を教育していくときに十分に考慮に入れていかなければならないと考える。

生徒の特性・実態を無視して、「よき職業人を育成する」というひとつの考えのもとで、この学習の目標を意欲・知識・技能・態度のみを配慮して、存在させることは無意味なことである。生徒の中には、作業の習慣形成を第1とすることよりも以前に、情緒の安定や性格の育成を問題にしなければならないもの、また、これらのことを解決したものは、生産的な側面を重要視していくことを忘れてはならないと思われる。情緒的に不安定なものや作業の習慣形成ができていないものに、生産することを強要しても学習の効果は望むことはできないし、情緒的に安定し作業の習慣形成が十分に満たされていても性格的にまづさがある場合は問題が残る。そこで、教育相、生産相、情操相の取り扱いが重要となってくる。

生徒の特性傾向から教育相、生産相、情操相のうちのいずれを中心的に取り扱い、それに伴って、どれを付随的に配置していくかを考えていくべきである。これを指導過程の中に、正しく組織化する必要がある。そのうえで、これらの各相をお互いに親密に調和を保ち、相互に作用させていくことが大切であり、この各相を生徒の成長・発達によって、常に弾力的に変化調整していくことが重要であると考えられる。また、教育相、生産相、情操相を単独で存在させることは、作業学習の性格を失なわせることになると思われる。

VI 教育的側面からの問題

1) 施設について

農耕作業学習を行なう場合に、必ず作物を栽培する場所が必要となる。作物を栽培する花壇や農園は特殊学級に限らず、学校全体として、教室とは異なる生活の場、教育の場として当然設置しなければならない。校舎外環境の整備と充実の面からも大切で、これは情操との係わりあいからも重要である。しかし、現実の問題は、それを設置する適当な場所を選定し、施設することは容易なことではなく悩みである。この問題は、全校職員や父兄の協力によって解決して行くことや、施設を設営する際は、校地全体から考究していくことが大切であると思われる。

2) 農園で取り上げる栽培物について

農園で取り上げる栽培物選定の条件は、農園規模や立地条件に適した種類の作物を選ぶことが大切である。それを無視することは、育たない作物を作ることになり、生産に結びつかないことになる。農園の大きさや立地条件を考慮し、環境美化のために園芸作物を多く取り入れそれを普通学級

の花壇や地域社会に供給することも一考であると思われる。

また、精神薄弱児であるという観点のもとで、取り扱いの困難な作物は導入しないという考えには問題がある。取り扱いが複雑なものは、指導の過程で正しくそれを認識させることによって、取扱いは容易になるし、観察の仕方のまずさや重要な点を把握することの能力が欠如していることが認められている精神薄弱児にとって、それは生徒の感覚（視覚、色彩弁別）や観察力と結びつき有効な面があると考ええる。

3) 作業の際の服装と安全・能率

服装は作業の安全と能率の点から、特に考える必要がある。また、栽培技術のみではなく、作業の指導の範囲は、極めて広いものであるが、そのうち作業の安全と能率の指導は重要なものである。特に精神薄弱児は安全や能率への配慮が欠けてはいけなく考える。

服装の指導は、作業環境を十分に考慮し、運動機能や体力に問題がある精神薄弱児の作業動作が妨害されないように工夫する。具体的には、厚着にならないように体温の調節ができるようにする。また、動作が鈍くなることを防止するために、作業着は体育時のジャージトレパン、トレシャツがよいであろう。靴は作業の質によって、長靴か短靴かを選択すべきである。手袋は、普通の軍手と軍手の指の取ったものの両方があれば便利である。⁹⁾

また、作業着、靴、手袋は、泥がついたり、汗をかいいたりして不衛生になるので、洗濯をして、十分に手入れをした清潔なものを着用するように指導することが大切である。

作業の安全や能率を確保するためには、服装に限らずに、指導形態、指導単位の人数、作業秩序・順序、用具の取り扱いや管理方法などの多くの面で考慮を必要とする。

4) 経済の取り扱いについて

作業学習の性格によって異なるが、教育や生産の側面があることを忘れてはならない。農園経営を重視した生産的な要素を取り入れ、生徒の活動をより社会化することは望ましいことである。農園で作った作物類を地域や生徒に販売し、その収入を経費の一部に当てることにより、生産的な性格を持たすことができる。

精神薄弱児にとって、経済面を学習の要素の素材として取り上げることは重要である。生産物を販売した収入の中から施設設備費としたり、生産費の計算の結果出た収入を、作物の栽培が経済的にみて、経営的に成り立つかどうかを吟味することは、学習として最も大切な側面である。その際、考慮をしなければならないことは、生産物を販売する場合に、学校であるということで、市価よりも安価に販売しているが、学習として取り扱うときは市場価格で計算させることが大切である。それが消費機構を知る手がかりとなる。

また、生産費の計算にあたっては、運営費（種子代、肥料代、栽培管理費を含む）など実際にかかった費用も計算するが、生徒の人件費（生徒の労力）は計算していない。これは生産費の計算として、正しくないと考える。生徒の人件費が計算できるように、作業日誌、栽培日記などの記録を利用することが望まれ、その中から算出していくように努めていくべきである。

人件費に関連して、作業態度の良いもの、働きの良いものに、模擬貨幣を与えていくという operant conditioning を取り入れていく工夫も考えてみる必要があり、¹⁰⁾ そのことは、望ましい作業の習慣形成に結びついていくと思われる。

9) 皮膚感覚を必要とする作業がある、指を布で被うことは感覚を半減させてしまうので感覚を大切にすることが必要である。

10) 模擬貨幣による強化ではなく、社会的なものの強化も必要である。

Ⅶ 教育の立場からの生産の倫理性について

物事を計画したり、それを実践していくとき、必ず人とのかかわりあいのもとで展開され、関係する人々とのチーム・ワークを如何にして、求めるかが問題となる。生産活動を考えて行くとき、そのことが考えられる。しかし、この問題の解決は、生産それ自体が人の和によって行なわれることを理解するとき、その解決の方向が得られる。生産者は、一方において使用者とつながると同時に、生産に従事するとき、生産するための原料を提供するものともかかわってくる。この生産が持つところの社会的関連を考えると、お互いの立場を考えて結びあう信頼の関係が、生産の基本的な根底をなす条件になると思われる。

この意味で、生産を重んじる精神薄弱児の作業学習は関係しあうものが、相互に親密・協調の精神をもって、結合しなければならないと考える。その中で、最も大切なことは、学級の生徒同士の結びつきがそのようであればならないし、親密と協調して行く伝統を作って行かなければならないと考える。それには、生徒同士が常に協調・協同の夢を持って、それが生きるように学級の指導に努力すべきである。このために、お互いに長所を認めあい、お互いの欠点を非難することなく、無言のうちに実行を以って、その欠陥を自ら進んで補ないあう、温かい実践力と実行愛を取り上げることが大切である。ここに生産の倫理性を見いだすのであり、この意味で生産は物を作る前に、人の和を作らなければならないと考える。生産を教えるとき、教師はこの点を踏まえ、尊重する姿勢を持つことが重要であると考えられる。

Ⅷ 実践の中から検証されたこと

生徒と教師は「私たちの農園ができるんだ」という希望を持ちながら、人に目をむけられなかった「野地」を開墾した。開墾の第1日から、笹などの障害にあり、農園造成の作業の過程は困難の連続であった。

しかし、このことは生徒たちに「なにくそ、負けるか頑張るぞ」という気持ちを持たせることができ、お互いが協力し助けあうという集団作りに有効であった。農園を着手する以前の生徒、いや学級の中での状態は、個と個の結びつきはそれほど強いものではなかった。農地造成において、土を運搬したり、石ころを集めたりするにも、お互いが心と心をひとつにして助けあい、協力して行なわなければそれを成しとげることができなくなる。すなわち「自分勝手なわがままはゆるされない」「自己を律して行く」「人を信頼する」「協調・協力」ということが、強く要求される。連続した作業の過程で、そのことが満足され、「お互いに助けあって作業をした」という喜びによって、生徒同士が深いきずなで結ばれる結果となったものと考えられる。

また、そのことから派生して、「Tちゃん、だいじょうぶかい」「Jちゃん、疲れたのかい、少し休みなさい」など思いやりの態度へとつながって行った。そこに単純な対人関係の適応を考えることができ、その範囲を拡大して行くことによって、望ましい人間関係を学ばせることができると考える。

農園での作業を生徒たちに次のように組織した。能力差のある異質グループを編成し、リーダーを決め、お互いにそのグループの中で持ち味を生かした役割を持たせ、協力して考えあひながら作業を進めるようにした。このようなグループ・トレーニング活動により、個々の生徒たちは認めあひながら活動していた。その結果、集団参加の困難であった生徒も、友だちに助けられながらグループに所属し、また、学級の中で安定した位置を得るようになってきているとともに、日常生活面での自信ある行動に結びついている。例えば人前では、すぐ黙まりこくってしまうK君は少しずつ

ではあるが、人前でも話せるようになった。また、T君やW君は「今日、おれどうすればいいのよ」「どうやってやるの」と聞きながら、友だちにはげまされながら作業を進めるようになり、そこにひとつの目的指向性をもって行動していることが感じられた。

現在、農園作業で培われた作業の集団が、遊びの集団学習の集団へと転化している。それは今まで、ただ過ごしていた休憩時間に将棋をしたり、卓球などのゲームをして有意義に過ごしている。それはみな生徒自身からの発想によるものである。また、学習時間にお互いに助けあい、教えられたり教えたりという関係を保って、よりたくましく成長している。

農園作業は動的であるわりに、単純な動作の繰り返しが多い場合がある。その結果、作業を一生懸命にする生徒とそうでない生徒の作業量の差がだんだん開いていった。特に開墾の作業に意欲と興味を持ってやらせることは容易なことではなかった。差が生じた原因として考えられることは、生徒自身に今開墾している場所が将来、畑になり、ニンジンやイモなどを植えて、収穫するという見通しがもてたか、持てないかによる。それは「作物を植えたことがある」「収穫したことがある」という生活経験によって生まれてくるものであり、それが興味や意欲に結びつくとも考える。生徒たちに作業を与える際に、興味が持続していくように「今、畑を耕さなければ種子をまけないんだよ」「ジャガイモやトウモロコシを植えるんだよ。大きくなったら、食べれるんだ」と生徒ひとりひとりに働きかけていった。こうして作業を進めていくうちに、行なっていることの意味を理解し、意欲的に行なうようになってきた。しかし、今後、感情の持続をどのように持っていくかを検討しなければならない。

また、特に「花や作物の芽が出た」という時点から、大きく生徒の姿勢が変わってきた。「芽が出た」という感動的な叫び、その体験が「生きものへの愛情」「自然に対するおどろき」となって、農園での経験を大切にしようという心情に結びつき、農園での作業を一生懸命する態度に変わってきた。また、「芽が出た」というひとつの体験が、別な作物へと移っていき、「イモまだかな」と言いながら、イモの植えてある場所へ行って、注意深く土の上を見る生徒など自然に対して興味を持つようになってきた。そのような生徒の中に「どうして、あんな小さな種子からこんなに大きくなるの」と質問したり、「葉っぱ、虫に食われているぞ、虫、殺さないのか」と大きな声で呼ぶ生徒も出てきた。

農園に水道施設がないため、水道のある所まで行って水をくんで、花に灌水していた際に、F君が「沢にきれいな水が流れている。水槽を作って、溜めれば」とか「先生ここに階段あると楽だね」といった生徒自身の発想で、進んで物事に当たる態度が芽ばえ、それを実行するようになった。まわりの生徒が「臭い、臭い」と言いながら、逃げまわるのに構わず「なによ、おまえたち毎日たれているくせに」とつぶやきながら肥料をやる生徒、また伐採、枝払い、切株ほりに絶対の力量を発揮する生徒たちなど、生徒の意外な面を発見することができた。作物を収穫した際、わずかではあるが家庭に収穫物を持たせてやると、つぎの日「先生、おつゆのみにして食べたよ」と報告してくれる。中には「ぼくが作ったものだから、ぼくがたくさん食べるよ」といって食べました」という話を母親から聞く。これは自分が働いて作ったのだという自覚からきているものであろう。

む す び

「わたしたちの畑が欲しい」という生徒の小さな願いがかない校庭の片隅に夢と希望を持たせる農園ができたのが、ちょうど3年前。それから3年、人に目を向けられなかった「校庭の片隅」が生徒の力によって、大きく変えられた。

それを私たちは自然を素材とした作業学習としてとらえた。無から有への生産的活動の過程で、

生徒は開墾中の血と涙のまざりあった人間らしさの体験、「土の中から芽がでた」という感動的な体験、「あっ、イモだ」という収穫の喜びなど多くを味わった。そこには他の学習では見いだすことのできない事物の創造性と人間らしい姿というものが、現出していたと信じる。その結果、生徒は、「明るく」「たくましく」成長した。

本稿を終わるに当たり、本実践の推進のために積極的にご援助をいただいた、高橋徳太郎校長ならびに志田信弘教頭に、感謝の意を表するものです。

参 考 文 献

- 安藤 堯雄：教育大学講座，職業教育21，金子書房（1950）
城戸幡太郎：生産教育の技術，小学館（1950）
森 昭：経験主義の教育原理，金子書房（1952）
佐々木 喬：学校農場とその運営，産業図書株式会社（1955）
東京学芸大学教育研究所：精神薄弱児教育の基本問題教育研究所第8年報，学芸図書株式会社（1961）
伊藤隆二：精神薄弱児の心理学，日本文化科学社（1964）
誠文堂新光社編：学校園の12ヵ月（1965）
武 政太郎・辰野千寿：発達心理学概説，金子書房（1968）
田中教育研究所編：幼児指導の心理講座3 自然，明治図書（1968）
教師養成研究会幼児教育部会編：幼児教育叢書5 幼児の自然指導，学芸図書株式会社（1968）



1. 客土作業をする生徒



2. 土をバケツで運搬する生徒



3. 畑の耕起中の生徒



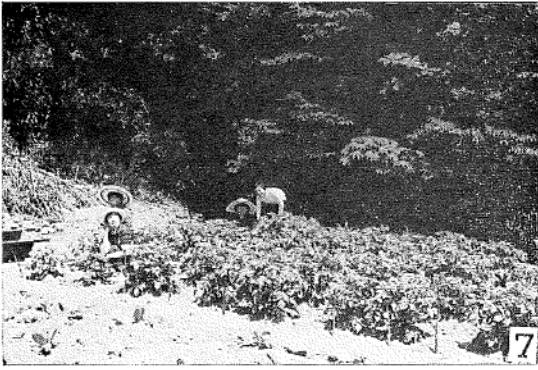
4. 頑張る生徒



5. 教師と生徒が一丸となって作業をする



6. 冷床の草取りをする生徒



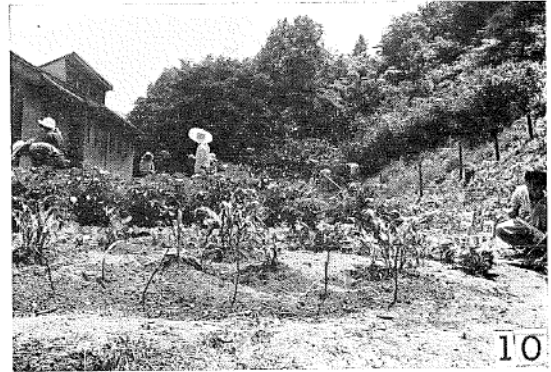
7. 受け持ちの所の草取りをする生徒



8. 助けあいながら作業をする生徒たち



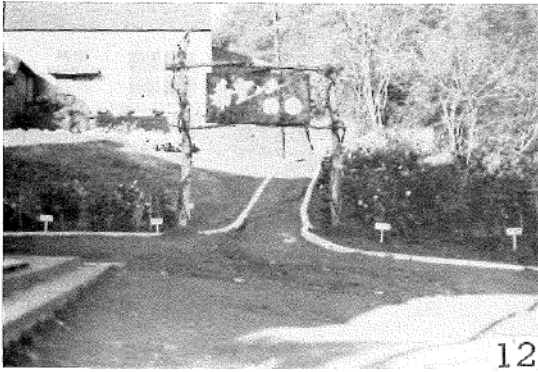
9. 自分の受け持ち花壇に自主的に水をやる生徒



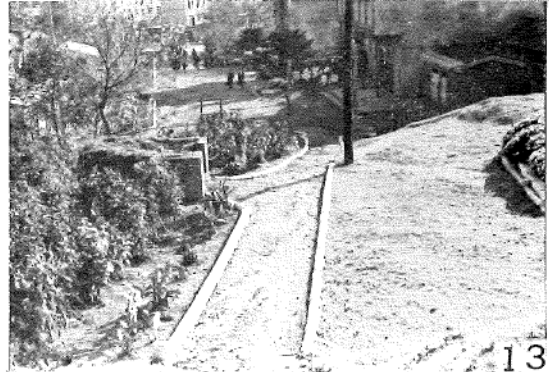
10. 大きくなった作物



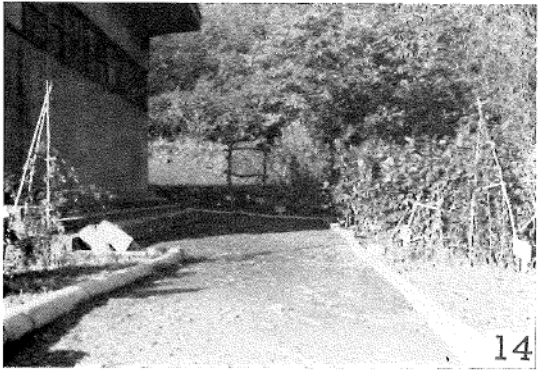
11. はじめての収穫のよろこび



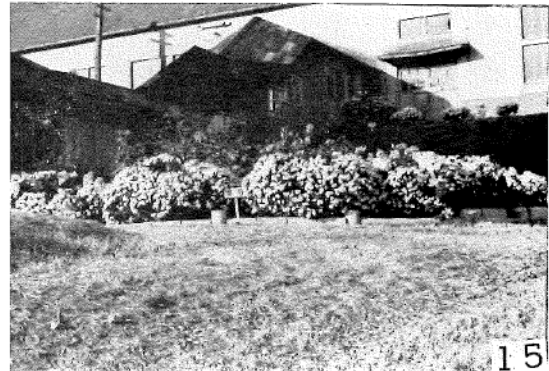
12. 農園の入口



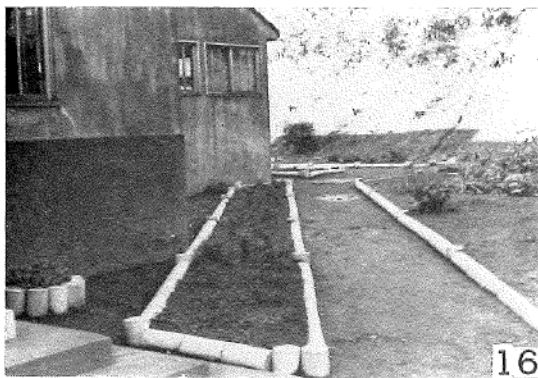
13. 上からながめた花壇



14. 階段をのぼった所



15. 花がさきほころぶ花壇



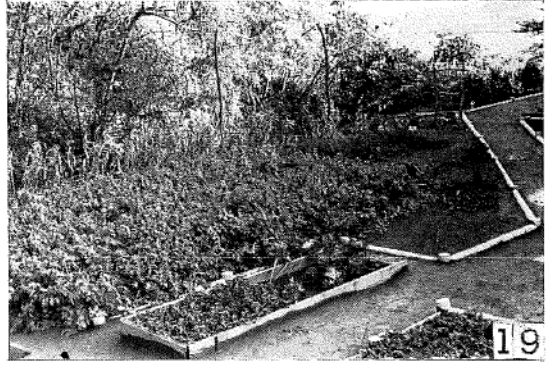
16. 花壇



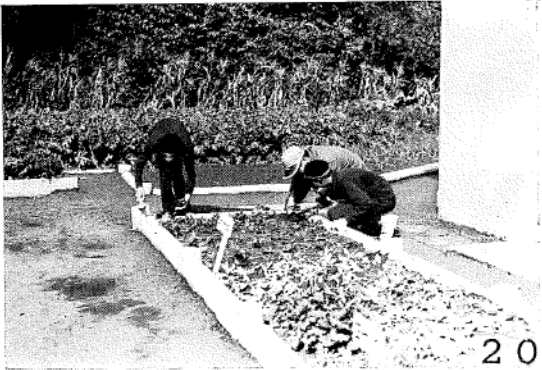
17. 農具小屋、育苗圃、温室



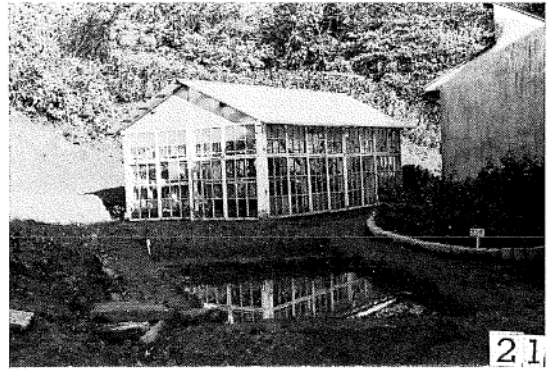
18. 生徒の力できれいにされた斜面



19. 蔬菜圃場



20. 鉢上げ用の花をとる生徒



21. 温室、水田、ため池



22. 生徒の発想による階段



23. 生徒の発想による水槽